

まちだづくり 応援基金

応援基金
まちだづくり



MACHIDA CHALLENGE FUND

まちだづくり応援基金

町田市内で活動する方を応援したいという想いを持った方からのご寄付により、「まちだづくり応援基金」を設立いたしました。本基金により町田市のまちをよくする志をもった個人、団体の「新しいチャレンジ」にあたる取り組みに対して助成します。

基金の目的

<志を応援しあうまちにする>

町田で活動する方、町田で暮らす方、町田に想いのある方が、町田市内でまちづくりに取り組む個人、団体のチャレンジを応援し、志を応援しあえるまちにする。

<小さなチャレンジを後押しする>

小さくても新しいユニークなチャレンジをする人を後押しする。新しいチャレンジだからこそ失敗も歓迎し、失敗からも学び合えるまちにする。

2025年度の選考経過

2025年度は、11件の応募があり9件の活動が助成対象として採択されました。7月2日のプレゼンテーション審査、7月9日の選考会議と2日間にわたって実施された選考委員会では、公募により決定した5名の選考委員の皆さんがあなたが様々な角度から評価し、総合的に助成対象を決定しました。

<選考委員会で評価された活動の良かった点>

- これまでの実績や専門性を活かしたうえで、新しい対象やエリアで活動を広げようとする取り組みであり、プログラムの趣旨である「新しいチャレンジ」に合致している。
- 活動を通じて実現したい地域や社会と活動の内容や対象、協力連携したい組織や団体などのつながりが明確で説得力がある。
- 楽しそうな内容で、特定の人だけでなく多くの人が参加できる企画である。
- プrezentationが十分に準備されていて、短時間でもわかりやすい内容だった。

<選考委員会で採択、不採択問わず指摘があった点>

- 対象となる人のニーズ把握やリーチ方法（集客・広報）について戦略が弱い。
- これまでの活動の延長線上にある内容であり、「新しいチャレンジ」というプログラムの趣旨の合致度が弱い。
- 助成金以外の資金も視野に入れて参加費を徴収する、地域で協賛を集めるなどにも取り組んでほしい。参加費を徴収することでより内容や集客などより真剣に取り組めるという利点がある。

<審査後の審査員からの全体的な感想>

- 町田にこんなに多彩な活動をされている方がいらっしゃるんだとわくわくした。
- 活動のジャンル、活動の対象も多様で、また応募者も幅広い年齢層の方が参加していてよかったです。
- 町田にこんなに熱い人が多くいるということが知れて、嬉しい気持ちになった。

2025年度助成対象一覧

団体名・個人名	事業	助成額(円)
清住平Wind Music	小山田で音楽活動を通じて、地域住民の交流を深める！『OYAMADA Music Festival』)	20,000
高齢者共生の会	地域における認知症研修を、フレイルとの関係を踏まえ、関係団体と連携し、自治会からの支援を活用し、レベルアップして開催する	15,000
スヌーズレンブラックライトルームを普及する会	障がいを持つお子さんや保護者の方に気兼ねなく楽しんでもらための空間「スヌーズレンブラックライトルーム」無料体験会の開催	50,000
萩原恵美子	不登校経験のある中・高校生の折り染め先生プロジェクト	44,000
町田いのちの授業研究会 助産師サークル	出張！いのちの授業～町田市の助産師が中学生へ伝えているいのちの話～	40,000
町田emoプロジェクト	孤独ゼロへ！町田emoアクション～ごみ拾いとジョギングで心を結ぶ～	15,000
丸山子ども会	地域をつなぐハロウィンウォーク	50,000
もこもこフェスティバル	2つの防犯講座～子どもを守る=地域を守る～	40,000
ゆるっとこども未来まちだ	子育て当事者による子育て世代の投票率向上プロジェクトinまちだ	25,000

サポートオフィスインターン生による

まちだづくり応援基金 助成対象インタビュー

助成による活動のスタートにあたって、採択された9団体/個人に、活動への想いや今後の意気込みを語っていただくインタビューを実施しました。

インタビュアーは、今夏さがまちインターンシップ（運営：さがまちコンソーシアム）のプログラムで、8日間サポートオフィスでインターンシップを行った大学生の皆さんです。

次ページ以降にインタビューの内容を掲載しています。ご覧ください。



清住平Wind Music

小山田で音楽活動を通じて、地域住民の交流を深める！『OYAMADA Music Festival』)

Q1.主な活動内容は何ですか？

A1. 私たちは、町内会のお祭りや町田市市民協働フェスティバルまちカフエ！、地域の施設などで演奏活動を行っています。この活動は、清住平自治会のお祭りで「演奏してもらえないか？」というお誘いをきっかけに音楽をやりたい人が集まってできたバンドです。

現在は、隣町などへと活動の輪を広げ、音楽経験者も未経験者も一緒に楽しく演奏しながら交流を深めています。楽器はフルートやサックス、トランペットなどの管楽器から、ギター、ウクレレ、ベースまでさまざまです。持っている楽器で気軽に参加できるのが魅力です。「自分たちも楽しみ、聴いてくださる方にも楽しんでもらう」をモットーに「みんなが喜ぶ曲は何だろう？」と考えながら曲を選び、地域に音楽の輪を広げています。

Q2.バンドに皆さんに入ったきっかけは何ですか？

A2. 楽器は未経験でしたが、メンバーと何か一つを作り上げることが楽しそうだと思い入りました。また、自身が楽しむだけではなく、自治会の方々にも演奏を聴いて楽しんでもらえたら嬉しいなという希望を込めて参加を決めました。他の方は、小中学校からの同級生に誘われたから、Instagramを見て、などさまざまな理由がきっかけです。

Q3.この活動のやりがいは何ですか？

A3. 日常生活の忙しさや人間関係から離れて好きなことを楽しめる時間を過ごされることです。失敗ひとつ許されない場では全くないので、老若男女問わず、利害関係なしに、仲間と一つのことを成し遂げられることにやりがいを感じます。

Q4.今後に向けて考えていることはありますか？

A4. 町田には、小学校の吹奏楽部や鼓笛隊が少なく、生で見る機会も少ないと思います。気軽に楽器を経験する場がない子どもたちに興味を持ってもらうきっかけになれればと思います。

また、音楽で地域を楽しく盛り上げ、音楽を町田の特色にしたいです。その第一歩として、私たちが2026年3月に小山田小学校で初開催する「OYAMADA JOYFUL FESTIVAL-おやまだじよいふるフェス-」を通して地域がひとつになり、挨拶をし合えるような関係を目指していきたいです。この演奏活動が地域での防犯にも繋がったり、災害が起きたときに顔見知りで助け合いやすい関係になったりと、良い影響に繋がるようアクションしていきます。

高齢者共生の会

地域における認知症研修を、フレイルとの関係を踏まえ、関係団体と連携し、自治会からの支援を活用し、レベルアップして開催する

Q1. 以前から取り組まれている「認知症講座」について教えてください。

A1. 講座によって認知症への偏見と誤解を解き、差別などを無くしたいという考え方のもとテーマを決定し、講師をお呼びして開催しています。認知症についての医学的な話ではなく、身近な人が認知症になったときにどうしたらよいのかを考えることに重点を置いた内容となっています。

講座内では、テーマに対する解説に加えて意見交換も行っています。認知症当事者のご家族の方からどう関わっていけば良いのか、また認知症になった後でも今までのようにご近所づきあいができるのかなどといったご質問が上がり、参加された皆さんは活発に意見交換を行っていました。

Q2. 活動をしていく上でのやりがいは何ですか？

A2. 講座の開催によって地域の人の認知症に対する意識が変わり、自分自身で認知症だという意識を持って、そのことを周囲の人に伝えている方も増えてきたを感じています。それによって、活動をしていく大切さを実感しました。

また、地域には様々な個性や能力を持った人がいて、活動を通してその能力を活かすことで私たちの健康寿命を延ばすことにもつながっていると考えています。

例えば、今まで仕事上で勉強してきたことが形を変えて、地域の皆さんや家族と話すときの材料になり、自分の幸せにつながるなど、活動をしているからこそ今まで積み重ねてきたものが活かされる瞬間というのは数多くあります。

Q3. 今後の活動について、新たに挑戦していきたいことはありますか？

A3. ご近所づきあいが希薄になってきているため、住み開き*などの若い世代も含めた地域の中で助け合える仕組みを作りたいと考えています。

また勉強して知識を蓄えるだけでなく、一人で暮らす高齢者に対する相談窓口の設置や、4つの「不」**を把握してそれを無くすための活動など、実際にサポートできる仕組みを作り上げていきたいと考えているメンバーもいます。

*住み開きとは：自宅の一部に外部の人と交流できる空間を設けること

**4つの不とは：不安、不便、不満、不快のこと

スヌーズレンブラックライトルームを普及する会 障がいを持つお子さんや保護者の方に気兼ねなく楽しんでもらための空間「スヌーズレンブラックライトルーム」無料体験会の開催

Q1. この活動を始めたきっかけとやりがいを教えてください。

A1. 7年ほど前に、スヌーズレンの活動をしているNPO団体の理事長に教えてもらい、スヌーズレンに関して様々なお話を聞いたことがきっかけです。そして、発達障がい・学習障がい・自閉症スペクトラム等の子どもたちの療育になることやリラックス効果があることなどを知ることができました。お話を聞いた際に、スヌーズレンの普及に携わることが「今まで自分が35年以上にわたりブラックライトの仕事をやってきた使命なのかも知れない」と感じてスヌーズレンの普及活動を行っていこうと考えました。具体的な活動を開始して三年目になりますが昨年の町田市市民協働フェスティバルまちカフェ！に出演した際、あるご家族に「障がいがある子どもを外のイベントに連れて行けるか不安だった」と言われました。しかし、イベントに参加してとても楽しんでくれたようで、「こうした場所が常設でどこかで体験できるといいですね」と言されました。その言葉を受け、将来的には常設で体験できるような場所も作れたらと考えています。現在はその一環として訪問型の「おうちスヌーズレン」を考えています。このように、参加者の意見を聞いて次の展開を考えることも私のやりがいです。

Q2. この活動を行うにあたって、苦労した点は何でしょうか。

A2. やはり認知度でしょうか。スヌーズレンに関して活動をスタートした当時はエビデンスもなく認知度が低かったです。ただ、ブラックライトに関しては知識を持っていたので、多くの団体の方々に協力を要請しました。そして最初は、「スヌーズレンブラックライトルーム」という言葉を知ってもらうことから始めました。ただ、まだまだ周知の必要があるため、まちカフェのように多くの方が来場するイベントでの告知や普及に向けての情報発信していくことが重要です。

スヌーズレンブラックライトルームを普及する会

障がいを持つお子さんや保護者の方に気兼ねなく楽しんでもらための空間「スヌーズレンブラックライトルーム」無料体験会の開催

Q3. 事前に拝見した資料の中にスヌーズレンが「障がい児や認知症に効果がある」と書かれていましたが、その効果とは具体的にどういったものなのでしょうか。

A3. 数年前からいろいろな研究機関や大学からスヌーズレンの効果に対するエビデンスも発表されています。私はこれまで障がいを持っているお子さん向けてにスヌーズレン活動を行ってきましたが、高齢者の方々に向けては行ってきませんでした。そこで6ヶ月間、グループホームで週に2回、食事やトイレなどの介助の仕事を体験しました。初めの頃は大変なこともありましたが、何度か接しているうちに人間関係ができていき、そこに楽しみを見出すことができました。そうした認知症や障がい等の特性を持つ方々が「スヌーズレンブラックライトルーム」に入ると、興奮状態が抑制され怒りの感情も鎮まったというデータもあります。またある支援学校では授業の一環としてスヌーズレンルームを活用することで暗い空間の中で集中力が高まり気持ちも落ち着いて次の時間の授業がスムーズに進められたという話も聞きました。

Q4. 日本以外の国では、スヌーズレンの普及はどうなっているのでしょうか。

A4. 海外の例ですとヨーロッパ諸国は普及率が高いです。北欧のスウェーデンでは、学校内に「スヌーズレンルーム」を設置することが義務付けられている地域もあるそうです。

スヌーズレンには「ブラックライトルーム」と「ホワイトルーム」の2つの種類があります。私は「ブラックライトルーム」をもっと多くの方に知りたいし活用していただくためにも「楽しい体験型イベント」の要素を盛り込んで今後も普及活動に取り組んでいきたいと考えています。



萩原恵美子

不登校経験のある中・高生の折り染め先生プロジェクト

Q1. 不登校の子どもたちの支援を行おうと思ったきっかけは何ですか？

A1. もともと英語の教員として担任をしていたとき、不登校の子どもと出会いました。一対一で関わるうちに、その子が再び学校に通えるようになった経験があります。不登校の子どもたちは、自分自身について深く考えたり見つめ直したりする時間が長く、そのような時間に関わることに大きなやりがいを感じました。

Q2. 町田市でも活動を広げていきたいと思ったきっかけは何ですか？

A2. さがみはら地域づくり大学というプログラムの一つの講座にサポートオフィスの杉山さんの講座がありました。そのことをきっかけに町田でも活動を広げてみたいと思いました。相模原市に住んでいて近いのもありますし、他の市の活動の可能性を探ってみたかったというのもあります。

Q3. 実際に折り染めワークショップの先生を担当した子どもたちの感想で印象に残っていることはありますか？

A3. 不登校の子どもたちは比較的絵を描くのが好きな子どもが多いと感じているのですが、絵をほめても「誰でも描けます」とか「全然うまくないです」と否定するんです。折り染めは色を付けてから実際和紙を広げるまでどんな柄になるかわかりません。偶然できた柄をほめると「自分もきれいだなって思いました」「けっこううまくできました」と受け入れてくれるんです。それからまた描いた絵をほめると「ありがとうございます」と言うようになった子どもがいて、折り染めの力だなと思いました。

Q4. 活動の狙いと魅力について教えてください。

A4. 不登校の経験がある子どもたちが、「まちカフェ！」で一般の方に折り染めのやり方を教える企画を実施します。私は、子どもたちにとってある程度の緊張感は大切だと考えており、「失敗の少ない折り染めを教える」という活動は、ちょうどよい緊張感の中で何かをやり遂げる経験として最適だと思っています。また、子どもたちが「先生」として誰かに教える機会はあまり多くないため、この経験が、彼らにとって人生の新たな一步を踏み出すきっかけになればと願っています。

Q5. 今後チャレンジしていきたいことはありますか？

A5. 中学生の不登校の子どもたちが小学生の不登校の子どもたちに教えるワークショップをやってみたいと思っています。不登校を経験した子たちが少し上のお兄さん・お姉さんがこんなふうに活躍しているんだという安心感を持ってもらいたいです。

また、中学生が空港で外国人の方々に折り染めを英語で教えるという取り組みにもチャレンジしてみたいです。教えるときに何を英語で話すかは最低限のことを覚えればできちゃうと思います。子どもたちにとって「英語で教えたんだぜ」という自信になるような取り組みにしていきたいです。



町田いのちの授業研究会助産師サークル

出張！いのちの授業～町田市の助産師が中学生へ伝えているいのちの話～

Q1. この活動を始めたきっかけや活動内容について教えてください。

A1. 2012年、町田市のある中学校の養護教諭から一本の電話がきっかけで、「いのちの授業」が始まりました。助産師として日々出産に関わる中で、「命の重さ」を子どもたちに直接伝える活動ができないか、という想いから、有志の養護教諭と助産師数名で始めた小さな取り組みでした。

活動の目的は、「生きること」「命をつなぐこと」の大切さを伝えることです。最初の頃は、妊婦体験をどう行うか、赤ちゃんの人形をどう用意するかなど、毎月夜に集まり話し合いを重ねてきました。お金がなければ、自作。リュックに砂を詰めて重さを再現したり、人形をかき集めたりと、工夫を凝らして活動を形にしていきました。

現在では、町田市内の中学3年生を中心に、年間10校以上で命の授業が実施されています。特に多いのは、受験が終わった後、卒業直前の3月で、高校進学を前に、「これから生き方」や「自分を大切にすること」を考える時間となっています。市内全20の中学校で実施することを目指しています。

授業では、妊娠・出産のリアルな話、心音を聴く体験、赤ちゃんを抱っこする体験など、体験型学習が中心です。10年以上続くこの活動の軸は、「命を知ることは自分を知ること」という考え方になります。

Q2. みなさんの活動への想いを教えてください。

A2. 生後間もない乳児遺棄のニュースを目にすると「そのような事が起こる前に何かを伝えられなかったか」と悔しい気持ちになります。同じような状況にある若い命たちに、もっと早く、正しい情報を届けたいと強く思うようになりました。

・私は助産師の仕事の他に大学院で研究をしています。性教育が単に性行為に関するだけでなく、幼児期から命の大切さや自分を守る力を養う教育であるべきだと考えるようになりました。幼児への性教育に関して重要なテーマとして研究し、実践に活かせるようにしたいと思っています。そして、その際に大切なのは保護者の理解だと考えています。

・最初はサポート役として活動を始めましたが、今では自分自身が講師として授業を担当する立場になり、子どもたち一人一人に向き合えるようになりました。この活動を通じて自分自身の成長も感じています。

・自分と同じ世代のママが子どもにどう話すか悩んでいるという話を聞いたりもするので、そういう想いにも寄り添えたらいいなと思っています。

・大学時代、「ぶれいす東京」というHIV/エイズの方の支援団体でボランティアをしていました。その中で性教育の活動もあったのですが、様々な背景で実施できなくなってしまったという経験があります。その経験から、いつか取り組みたいという想いがずっとありました。

町田いのちの授業研究会助産師サークル

出張！いのちの授業～町田市の助産師が中学生へ伝えているいのちの話～

・病院で勤務していたとき同僚と幼児向けのいのちの授業に少しだけとりくんだことがあります。いつかきちんと取り組みたいと思っていたので、参加しました。

Q3. やりがいを感じることについて教えてください。

A3.・中学生も大人もみんな自分のことを知りたいんですよね。自分のことを知って「自分っていいな」と思ってもらうことができることがやりがいです。

・中学校の授業では赤ちゃんにも参加してもらうのですが、付き添いで来ていたお父さんが、「知らないことがたくさんあった」と感想を話してくださった時、もっと伝えなければならぬと感じました。

・私たちは、「親に感謝しなさい」とかそういう話はしません。中には家庭のことで辛い思いをしている子もいます。そういう生徒から長い感想をもらうこともあります、そうした子たちに響いていることがあって、感想を寄せてくれたのだと感じると、活動を続けていかなければと思います。

Q4. 今後の取り組みについて教えてください。

活動が広がるにつれて、「いのちの授業」は「包括的性教育」へも広がりつつあります。単に「命は大切」と伝えるだけでなく、自分の性や相手の尊厳をどう大切に扱うかというテーマにも踏み込んでいます。

しかし、保護者や教員、地域の方々は、学校で性教育を受けていない世代です。そのため、反発や誤解も少なくありません。「そんな話は早すぎる」「出産の苦労をもっと伝えるべきだ」といった意見も寄せられます。

そのような背景から、現在中学生を対象に行っている「いのちの授業」を、保護者や地域の支援者など大人世代に向けて発信していきたいと考えています。

まちだづくり応援基金では、その目的の一環として、まちカフェ！で一般の方向けに「出張！いのちの授業」を開催予定です。



町田emoプロジェクト

孤独ゼロへ！町田emoアクション～ごみ拾いとジョギングで心を結ぶ～

Q1. 主な活動内容は何ですか？

A1. 現在の主な活動内容はプロギング（ゴミ拾い×ジョギング）です。ゴミ拾いは社会貢献意識が強いイメージ、ジョギングは体力のある人がやるイメージを持ちがちだと思いますが、参加者の層が異なる2つのコンテンツを組み合わせることで参加のハードルを下げ、普段関わることのない仲間との交流を通して楽しく社会貢献ができる充実感を得ることができます。人と人、人と自然をテーマに、「今の自分でいい」「好きなことを大事にしよう」と思える場を提供していきたいです。

Q2. やりがいを感じる瞬間はありますか？

A2. プロギングを通して参加者の表情が和らいでいく瞬間に立ち会えることです。初めて参加する方が緊張や不安を抱えていても、会話や気持ちを共有するプログラムの中で年齢を越えたつながりが生まれる瞬間に大きなやりがいを感じます。

Q3. 今後チャレンジしたいことは何ですか？

A3. プロギングを継続しながら新たに忠生公園で自然観察会を開催したいです。自然を楽しむことに焦点を当てて交流の幅を広げていきたいと思います。こちらのプログラムはジョギングが苦手な方でもお散歩感覚で気軽に参加していただけます。「感情」「共感」を大切に、人と人、人と自然がつながる場・拠点づくりを目指して活動を広げていく予定です。また、運営をきちんとしていくために法人化を目指しています。地域との協力体制を作るうえで信頼が得やすいため、法人化することで活動の幅を広げることができます。

Q4. 最後に、この活動をまだ知らない、興味を持ってくれた人へのメッセージをお願いします。

A4. 社会の中で生きづらさ・孤独を感じている人は多いのではないでしょうか。SNSでは多くの人とつながることができます、数字では増えているように見えても、本音で話せたり共感したりしてくれる人は意外と少ないということもあるのではないかと思います。リアルな関係が人の気持ちをほぐしたり、新しい自分に変われるきっかけになったりすると思います。私たちはこれからも対面での体験を提供していきます。周りに生きづらさを抱えている人がいれば声をかけて一緒に参加してもらえば幸いです。

丸山子ども会

地域をつなぐハロウィンウォーク

Q1. 活動をしていく中で印象に残った出来事はありますか？

A1. 昨年のハロウィンウォークでは、丸山子ども会の会員でない子どもたちも多く参加してくださいました。会員の子どもたちは張り切って準備を進め、当日は大人数でとても嬉しそうにイベントに参加してくれたことが印象に残っています。ハロウィンは、地域の方々にお菓子を配つもらったりなど団体内だけではまかなえない部分があるため、多くの人を巻き込んでイベントを行う価値があると感じています。また、地域を歩いて回ることで子どもたちだけではなく、この地域に住んでいらっしゃる方も一緒に楽しむことができ、普段の生活では交わることのない方々がイベントをきっかけにつながりを持ってくださることがとても嬉しかったです。

Q2. 今年行う「ハロウィンウォーク」を企画する上で意識したことはありますか？

A2. 地域の中のつながりをさらに増やすということを意識しました。特に普段から子どもたちの安全や笑顔のために尽力してくださっている方たちを皆さんに紹介したいと思い、今回のハロウィンウォークを企画しました。このような機会に保護者の方が知らない、子どもたちの世界を知ってほしいと考えています。

また、法政大学のボランティアサークルに所属する学生さんたちにワークショップで来ていただくことになり、普段は大学に通うだけで通り過ぎてしまう地域の外の方々にも相原の良さを伝えられるのではないかと考えています。

Q3. 今後の活動について、新たに挑戦していきたいことはありますか？

A3. 子どもたちの保護者の方々とお話しする場を作っていくたいと考えています。イベントに参加してくださってもお話しする機会がなく、その1回だけで関係が終わってしまうことも多いため、地域のつながりを増やすということが難しいと感じています。そのため、子ども会に入会する・しないは関係なく、子育ての悩みなどを共有できる気軽な場をつくりたいと考えています。

もこもこフェスティバル

2つの防犯講座～子どもを守る=地域を守る～

Q1. 生涯学習センターの講座を受講しようと思ったきっかけを教えてください。

A1. 私たちが参加していたのは、講師の選出、チラシづくり、運営などを自分たちで行う講座づくりのゼミでした。保育付きの講座だったので、講座中は子どもと離れて親同士で話し合える環境がとても魅力的で参加を決めました。コロナ下で世の中は閉塞的で、人と会ってお話したいというのも受講した理由の一つです。

もこもこフェスティバルを立ち上げることになったのは、そのゼミの中で講師として来ていただいた市民防犯インストラクターの武田信彦先生と出会ったのがきっかけでした。先生のお話を聞き、いろんな人に広げたいと思いました。

Q2. 今回初めてチャレンジされる「ネットリテラシー講座」は何を意識して企画されていますか？

A2. これから子どもたちがスマホを持つ年齢になるけど、家庭でどういうルールづくりやトラブルの回避方法があるのかをよく知らない保護者をターゲットとした企画です。私たちは子どもの頃、携帯電話などのデバイスを持たずに育った世代なので、純粹に学びたいという気持ちがあります。他の保護者の方もそうなんじゃないかと思っています。いざ子どもに持たせるとなったときに、知識があると安心ですよね。

Q3. 今後チャレンジしたいことはありますか？

A3. 大きな夢としては、「市民防犯アンバサダー」を名乗って啓蒙活動をしていきたいです。すでに勝手に名乗っていますが(笑)、子どもの年齢が上がるにつれて保護者である私たちもPTAや習い事などの新しいコミュニティに出会えると思うので、活動を広げていきたいです。活動するにつれ、少しずつ仲間が増え、活動場所が増え、認知が増えて、みんなが防犯の意識を持った市民となる安心安全な町田にするというのが壮大な目標です。が、まずはメンバーそれぞれが生活スタイルに変化がある中でも継続していく長い団体にしたいというのが一番の目標です。

ゆるっとこども未来まちだ

子育て当事者による子育て世代の投票率向上プロジェクト in まちだ

Q1. 普段行われているしゃべり場でお話されている内容について教えてください。

A1. 衣食住にかかわる身近なことや子育てのこと、学校の取り組みやお便りについて気になったことなどについて話しています。そういう会話の内容が講座のテーマ決めにつながることも多いです。選挙前はどこに入れる？なんて話も私たちのコミュニティでは出てくることもあります。政治のことを気軽に話せる場が必要だと感じます。

Q2. 皆さんにとってゆるっこども未来まちだはどんな存在ですか？

A2. 情報があふれている社会の中で、どういった選択肢があるのかということを話せる場になっているなと思っています。子育て中も一人で子どもを見ているのは大変だけれど、他のママたちと一緒に子育てをしている感があって安心できます。特にコロナ禍では子育て広場にも行けず孤独感がありました。やはり顔の見えるコミュニティやつっこんだ話ができる仲間がいる環境は大切だと思います。また、子どもにそういう姿を見せることで、地域に頼っていいんだなと思ってもらえたなら嬉しいです。

Q3. 今回のまちだづくり応援基金を通して取り組みたいことを教えてください。

A3. 20代の頃は自分たちのやりたいことに一生懸命で、正直政治のことにもあまり関心がありませんでした。変わったのはやはり子どもが見てからです。子育てを通して社会のことや政治のことにより関心が向くようになりました。今の子育て世代の人たちや若い世代の方にもぜひ知ってもらいたいと思い、今回「選挙に行こう」と呼びかける情報をまとめたチラシを発行する予定です。きっかけがあればアンテナを立てて気になってしまう人間の習性を利用して、アンテナに引っかかるようなチラシを作りたいです。

普段私たちにとって議員さんは遠い存在と思ってしまいがちですが、民主主義において議員さんは「市民の代表」だということを学びました。政治を身近に感じることでより安心安全に暮らせる社会になってほしいと思います。



町田市地域活動 サポートオフィス

事務局 一般財団法人 町田市地域活動サポートオフィス
〒194-0013 東京都町田市原町田4丁目9-8
町田市民フォーラム4階
TEL: 042-785-4871 (FAX: 4872)